

生体肝移植ドナーの意味付与——肯定感と否定感を分かつもの

立命館大学大学院 先端総合学術研究科 一宮茂子

要旨【修正版】

本要旨は 2013 年度博士論文要旨として提出したものを一部加筆修正したものである。

生体部分肝移植（以下、生体肝移植と略）の成否はレシピエントの生死だけで決まるのか。それ以外の意味付与で移植結果を受けとめるドナーがいるのはなぜか。本研究はドナーの意味付与に影響をおよぼす要因はなにかを問う。

方法は Y 病院のドナー体験者 19 名に半構造化面接インタビュー調査をおこない、収集データを KJ 法でカテゴリー化し、時系列チャートによる類型比較分析と要因分析をおこなった。

ドナーの肯定感は、移植が成功してレシピエントが生存しているだけでなく、ドナーとレシピエントが順調な経過をたどるだけでもない。ドナーとレシピエントの年齢が若く、ABO 血液型一致移植などの医学的条件によって良好な術後経過であったこと。また両者とも社会復帰を果たしたこと。さらに移植をめぐる家族・親族間の問題や葛藤がなかったことが関与者と肯定的な関係性をもたらし、ドナーは幸福感と肯定感をえていたことが明らかとなった。

しかし、レシピエントが生存し、ともに順調な経過をたどり社会復帰したとしても移植結果に一部否定的意味付与をおよぼす要因がふたつあった。ひとつはきょうだい間移植において生殖家族よりも定位家族への愛情を優先したドナー独断であり、もうひとつは親族の厚意的な金銭支援であった。前者はドナー夫婦間の軋轢のみならず、ドナー配偶者は、レシピエントとその家族と親族の関係性の不調和が何年も続いていた。後者はドナーの家計支持者である配偶者に家族・親族にたいする負い目という関係性の変容をもたらし、その感情が借財の源となったレシピエントであるわが子に投影されて、家族関係がギクシャクする変容が何年も続いていた。このように長年にわたる連続した負の関係性の変容が、レシピエントが生存しているにもかかわらずドナーの一部否定感となっていた。しかしこの 2 事例以外は、ある一定期間が経過するとレシピエントが生存していることで経験の再定義がおこなわれ、ドナーの一部否定感が肯定感へ変化したことが明らかとなった。

負担と犠牲を担って命がけで臓器を提供したドナーの代償が、レシピエントの死亡という結末ならば、ドナーが否定感をいだくのは当然であろう。さらに否定的な影響をおよぼしたのは関係性の変容であった。それは死亡過程に関与した娘の縁談の破談、親族関係の断絶、医療者に見放された感などであった。これらがドナーに否定的意味付与をもたらし不幸福感を増幅していたことが明らかとなった。

ところが低い成功率を承知のうえでレシピエントの希望を叶えるためにドナーを引き受けた事例では、レシピエントが死亡したとしても、ドナーが術後合併症やあらたな病気を発病したとしても、ドナーの疑念や不安の心情を汲みとった家族が医師にクレームを申し立てる代弁という心理的支援によって、医療者と良好な関係性が保持され、ドナーは達成感と肯定感をえていたことが明らかとなった。

以上のことからドナーの意味付与を分かつ要因はレシピエントの生死のみならず、関与者との関係性の変容と、その変容期間の長さであるといえる。死は不可避としても関係性の負の変容を軽減する対策が必要であることを明らかにし、その対応策を提言した。